

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

2018年4月25日 VOL.41 第285号 定価550円
 発行/AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1
 TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
 E-mail:member@amda.or.jp
 郵便振替:01250-2-40709 □口座名:特定非営利活動法人アムダ

2018年
春号

春

救える命があればどこへでも

ロヒンギャ難民

長引く過酷なキャンプ生活

ミャンマーから隣国のバングラデシュに逃れているイスラム系少数民族・ロヒンギャ難民の数は増え続け、過酷なキャンプ生活は長びく様相を見せています。国連は「未曾有の危機」として援助の拡大を呼び掛け、AMDAは2018年1月17日、菅波茂代表が現地入り。あらためて1年間にわたる長期支援を確認しました。

認定 特定非営利活動法人アムダ (AMDA)
<http://amda.or.jp/>
 認定 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
<http://www.amda-minds.org/>
 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
<http://amda-imic.com/>
 AMDA 兵庫
<http://amda-hyogo.com/>

菅波代表が現地入り

菅波代表はキャンプを訪問した感想について「難民はすることがない。ただ存在するだけである。禁固刑に等しい。大変なストレスである。私だったら数カ月も神経が持たないだろう」と述懐しています。(2面に菅波代表の手記)

キャンプには日本から長崎大学熱帯医学所国際保健学部の山本太郎教授、NPO 法人 TMAT 事務局の野口幸洋氏も同行し、実情調査をしました。

海外からの医療チーム派遣は AMDA バングラデシュ支部、日本バングラデシュ友好病院の協力を得てこれまで2回行われ、第1回は米田哲医師(2017年12月11日~23日)、2回目は国連パレスチナ難民救済事業機関

(UNRWA) の医師2人とともに押谷晴美看護師(2018年2月1日~13日)が派遣されました。

押谷看護師は「自分を含め、難民の方々は



難民キャンプでの医療支援活動の様子

ふるさと・ミャンマーで、誰かに襲われる恐怖を感じない安心した生活を望んでいる」と話していました。

難民は70万6千人急増

国連高等難民弁務官事務所 (UNHCR) の3月18日の発表によると、2017年8月以降、難民は70万6千人に急増。また8月以前からの合計では、86万9千人となっています。10月22日に開設したAMDA診療所の延べ患者数は3月31日現在、1万6,020人にのぼっています。

フィリピン火山噴火で緊急支援

フィリピン・ルソン島南部アルバイ州で起きたマヨン山噴火を受け、AMDAは2018年2月8日、現地にコーディネーターを派遣しました。

岡山倉敷フィリピンサークルの西アニー副代表は、JR岡山駅から午後3時28分発の新幹線で出発。現地時間9日未明に首都マニラに到着し、10日にAMDAフィリピン支部を中心とした被災者医療支援チームに合流しました。

地元のビコール大学、アルバイ州医師会、フィリピン国家災害リスク削減委員会管轄の保健所と連絡を取りながら活動。ビコール大学のAMSA(アジア医学生連絡協議会)の協力も得て、避難者266世帯1,071名に診療と食料物資を配布しました。マヨン山は1月13日以降、活発な火

山活動を繰り返し、2月5日時点で被災者数は8万6,052人。58カ所の避難所には1万7,137世帯、6万4,895人が身を寄せています(フィリピン社会福祉省発表)。

AMDAは2006年にも、マヨン山の火山灰泥流被害で緊急支援活動を行っています。



救援物資を配るAMDA調整員

AMDA 内視鏡技術研修事業 (ネパール・モンゴル)



ネパールにて上部消化管内視鏡検査指導をする佐藤医師



モンゴルにて下部消化管内視鏡治療指導

東亜大学医療学部教授佐藤拓史医師（モンゴル国立医科大学招聘教授、消化器科スーパーバイザー）がネパールとモンゴルを訪問し内視鏡技術研修を行いました。

2月23日～3月4日に訪問したネパール・ジャパ郡ダマック市には、内視鏡検査と治療が十分に出来る医師は未だおらず、上部消化管内視鏡検査の技術的指導、病変の診断等についてAMDAダマック病院の医師らに指導し、食道静脈瘤、消化管出血の疑い、心窩部痛等の内視鏡を施行しました。

3月16日～25日のモンゴルでの研修は昨年9月に続き2回目となり、モンゴル国立医科大学附属病院内視鏡チームからの要望に応えた、より実践的な研修となりました。研修中には、同大学学長、副学長、同附属病院副院長らも訪れ、内視鏡チームの診察に佐藤医師の所見を求めました。同国では、胃ガンの発生率が高く、死亡者数は肝臓ガンに続いて二番目。発見される胃ガンの3/4が進行ガンであり、ガンの早期発見のための内視鏡医の検査、診断、治療の技術向上が求められています。今回は、上部消化管内視鏡検査が109例、下部消化管内視鏡検査が20例、ポリープ切除術が3例、S状結腸捻転整復術1例、食道狭窄拡張術1例が施行され、食道がん1例、早期胃がん1例、進行性胃がん1例を発見しました。また、81人のピロリ菌検査を施行し53名が陽性でした。内視鏡実習後は日本での最新の内視鏡検査と治療についての講義が連日行われました。

佐藤医師は、「なぜ僕らは内視鏡の技術を身に付けることを志すのかよく考えてほしい。命を救うための技術であることを心に留めておいてほしい」と研修生たちに問いかけ今回の講義を終えました。

ロヒンギャ難民キャンプを訪れて

AMDA グループ代表 菅波 茂

2018年1月17日、バングラデシュのクックスバザール県にあるロヒンギャ難民のキャンプを訪れた。(1面に関連)

キャンプ内では、国連難民高等弁務官や各国のNGOが提供している粗末な住居が整然と建てられている。飲料水を確保するポンプは十分機能している。問題はトイレである。

当初は10世帯(1世帯が5~6人)ごとに簡易トイレが数個設置されたが、すぐにいっぱいとなり土をかぶせて終了した。現在は改善されたトイレが設置予定ではあるが、当初のトイレ設置に予算を使ってしまった現状がある。NGOの予算では無理である。国家予算の支援頼みである。4月から5月に始まる雨季は衛生上の問題が心配である。

食料は国連機関による登録前提の配給制である。道端には食料品や生活用品などを売っている大小さまざまなお店がある。多くは地元の人たちによる商売である。現金1万円以下で地元の人から購入した野菜や干物などを細々と売っている難民の人も多い。しかしな



がら、難民キャンプは帰国を前提としており、難民の人たちは何もすることがなく、社会から必要とされている状況にない。ただただ存在するだけである。私だったら数ヶ月も精神が持たないだろう。

AMDAは今回難民キャンプに診療所を開設しているが、場所が狭い。患者が120人から受診する現状で

は狭すぎるが、場所が確保できない。心電図、超音波そして簡単な血液検査機器を装備したバンを診療所の横に設置して活用をする「移動臨床検査センター」を考えている。

それ以上に我慢できなかったことがあった。患者たちが直に地面に座って診察待ちをしている光景である。他の団体の診療所でも同様だった。来る5月の雨季には地面がどろんこになる。直ちに、簡易ベンチを2列に設置するように依頼した。これは患者に対する敬意の問題である。イスラムの女性患者を直接に診察できるスペースの確保も同様である。難民であることと患者であることは別である。心して取り組みたいと思っている。

菅波代表がパキスタン家庭健康教育活動を視察

2017年12月13日より2日間、菅波代表はパキスタン家庭健康教育プログラム活動を視察しました。2014年より3年間継続している当プログラムは、未婚女性を対象に健康に関する知識向上を目指し、現地協力団体であるNRSP（ナショナルルーラルサポートプログラム）、茅ヶ崎中央ロータリークラブ様と一緒に実施しています。

活動地であるパキスタン南部シンド州タッタ県ミルプルサクロ地区とタンド・ムハマッド・カン県ディグモリ地区を訪れ、授業の参加者と交流しました。参加者の多くは勉強意欲があり、なかには看護師になりたいという夢を持っている方もいました。また、このプログラムの影響は家族や地域全体にも及び、教育の大切さに気付いた親が娘も学校に通わせ始めたという家庭も見られました。更に訪れたある村では、水質検査を実施し、ペンキを塗ることにより、飲料可能な水が出る井戸と飲料以外の用途で使用する井戸を区別するなど行動変化につながっていました。



今後は、当プログラムを通して、未婚女性の知識修得度及び行動変化等の最終調査を実施していきます。

インドのAPCで初めて、双子が誕生！

2017年12月28日、AMDAピースクリニック（APC）で健診を受けたお母さんが双子の女の子を出産しました。

お母さんは妊娠3か月目に近所の人に紹介され初めてAPCに来所、栄養不足等により体調を崩すこともありましたが、APCは継続的に経過を観察。無事に出産を終えたお母さんより「APCの人たちに妊娠中の私を支えてもらったおかげ。今は私が他の妊婦さんにAPCを紹介している」と嬉しい声が届きました。



震災・福祉で活発にフォーラム

総社市

「総社市の挑戦～全国屈指の福祉先駆都市へ～」をテーマにした同市とAMDA主催の「福祉フォーラム」が2018年3月3日、総社市三須の国民宿舎・サンロード吉備路で開かれました。

AMDAグループの菅波茂代表がコーディネーターを務め、コメンテーターとして蒲原基道・厚生労働事務次官、葛西健・WHO西太平洋地域事務局事業統括部長、松田久・岡山経済同友会代表幹事、片岡聡一・総社市長が討議しました。

菅波代表は、障害者1500人雇用を目指す総社市の取り組みについて「飛鳥時代から慈悲の心の精神風土が息づき、今に続いている」と指摘。蒲原氏は「弱者とともに一緒に生きていくことが大切」と述べました。

葛西氏は「アジア諸国は日本の先事例に興味を持っている。福祉の先駆都市を目指してほしい」と要望。片岡市長は「弱者に優しいまちづくりが市に品格を持たせる。さらに輝くまちづくりを目指したい」と意欲を示しました。

松田氏は近い将来、発生が懸念される南海トラフ地震について言及し「総社市は災害支援、被災者受け入れといった全国でも珍しい条例を相次いで制定している。経済界も“流通備蓄”を含めた支援をしていきたい」と述べました。

会場の市民ら約350人は熱心に聞き入っていました。

赤磐市

第4回被災地間交流フォーラム

東北三陸沿岸復興支援と南海トラフ地震の備えを話し合うAMDA主催の「第4回被災地間交流フォーラム」（赤磐市、赤磐市社会福祉協議会後援）が2018年2月18日、同市下市の山陽老人福祉センターで開かれ、「災害時の岡山の果たす役割」について活発な討議が行われました。



フォーラムは宮城、岩手、福島県の被災商店街から10人、高知、徳島県から行政関係者3人を含む約80人が参加。

岡山経済同友会の松田久代表幹事が「災害時の支援拠点・岡山」と題して講演。AMDAと連携協定を結んでいる赤磐、備前、総社市、和気町、丸亀市の各首長が“ひとことアピール（メッセージを含む）”を発表。

続いて、宮城県気仙沼市の南町紫神社前商店街事務局長の坂本正人氏は「地域の復興の現状」について、高知県黒潮町職員の友永公生氏は「事前復興の視点から考える地域振興」と題して、それぞれ講演しました。

フリーディスカッションでは、AMDAの菅波茂代表が司会を務め、出席者からは「国の補助金制度は被災地の実情に合わせて変更してほしい」「万一の時、底力となるのが住民同士のコミュニティ」といった声が出ていました。

AMDA を支えてくださっている支援者の皆様に、インタビュー形式で様々なエピソードをお伺いしている「支える喜びシリーズ」。16回目となる今回は岡山市吉備学区連合町内会の会長として、AMDA の活動にご支援をいただいている西村輝さんにお話を伺いました。

東北の惨状に衝撃

AMDA 本日はお忙しいなか、ありがとうございます。AMDA には度重なるご支援をいただき感謝し



ています。西村さんは国内で最大手の地質調査コンサルタント会社（東京）にお勤めでしたが、AMDA とのかかわりは何がきっかけとなったのでしょうか。

西村 1998年、東京でテレビを見ていて、AMDA が報道されていました。本部が古里の岡山市にあると知り、何か他人の役に立てたら…と「ER（緊急医療）ネットワーク登録」をAMDA に申請したのが始まりです。

AMDA 2001年に退職して岡山市に帰り、岡山地下水調査有限会社を設立。11年3月11日に東日

本大震災が起きた際、AMDA が派遣した医師や看護師ら10人でつくる「緊急医療チーム」の調整員として参加。約15日間、現地に滞在されました。

西村 宮城県南三陸町から岩手県大槌町に回りましたが、津波で家屋はすべて流され、がれきの山となった状況を見て「大変な事態となった」とあらためて衝撃を受け、人間の無力さを痛感しました。

AMDA 2014年、西村さんは地元の岡山市立吉備中学校の生徒4人を連れ、東北地方に行かれました。

西村 震災から3年が経過していたが、現状はがれきが片付けられていただけ。「復興にはかなりの時間がかかるな」と感じました。生徒は現地の子どもから「親戚が亡くなった」と聞き、かなりのショックを受けている様子でした。

AMDA 2016年の熊本地震の際も現地に出向いて行かれています。

西村 4月21日朝に一人で車に乗って岡山を出発。約10時間かけて現地に到着。震度7の地震に2回見舞われた熊本県益城町の広安小学校のAMDA 救護所で約15日間、活動しました。

大規模災害に備え連携協定

AMDA 吉備学区連合町内会とは2016年7月6日、南海トラフ地震など大規模災害時の緊急人道支援に

向けての連携協定も締結しています。

西村 吉備学区の人口は約1万7千人。「相互扶助」の精神で様々な自然災害に対処していきたいと思っています。

AMDA 2013年からAMDA 支援農場の世話人、2016年からは代表世話人としてもお世話になっています。

西村 私自身、3畝の農地で米を栽培していますが、支援農場には2つの目的があります。一つは東北への支援としてNPO法人「仙台夜回りグループ」への米の提供、もう一つは南海トラフ地震への備蓄です。

防災・減災意識の高揚を

AMDA AMDA に注文や提案がありましたら、率直なお考えをお願いします。

西村 震災地へ出向く調整員が知識を共有し、効率的な作業ができるよう研修会を開催しては如何でしょうか。さらに、防災・減災意識を国内各地でどう高めてゆくか、AMDA と足並みをそろえて頑張りたいですね。



2016年7月の協定調印式

AMDA 温かい激励をいただき、ありがとうございました。今後も一層の努力を重ねてまいります。引き続きご支援をよろしく願います。

AMDA インターナショナルアジア地域支部長会議

2018年1月27日から2日間、第2回AMDA インターナショナルアジア地域支部長会議をマレーシアの首都クアラルンプールで開催、14ヶ国46名の支部長らが出席しました。

会議の冒頭では、AMDAが取り組んでいるプロジェクト・プラットフォームの基礎となっている世界平和パートナーシップ（GPSP）構想に関して菅波代表から参加者への説明がありました。GPSPとは、活動対象地域に住む人々が平和に暮らせるよう、開かれた相互扶助、パートナーシップ、ローカルイニシアティブの3つのコンセプトのもとに、AMDAと協力団体が平和構築、健康増進、生活支援、教育の4つの分野において協力し、活動を推進していくものです。

続いて、近い将来確立していく世界災害医療プラットフォームに関するアイデアを共有。パートナー団体自己紹介の後、AMDA支部の活動、AMDA南海トラフ災害対応プラットフォームの取り組みをそれぞれ発表しました。AMDAの活動はいずれも、開かれた相互扶助の精神を具現化した取り組みであり、これらの議題について深く議論が交わされました。

今回の会議で特徴的だった点は、パートナー団体の参加があったことです。パートナー団体として、独立行政法人国立病院機構福山医療センター、台湾衛生省



より参加した台湾IHA（International Health Action）、ベトナム国防省175軍病院、ジャンプラットフォーム、TICO、NPO法人TMAT、モンゴル103救急サービス、そしてAMSA（アジア医学生連絡協議会）関係から、AMSA Alumni（卒業生部会）AMSA International、AMSA Japanが参加しました。

菅波代表は「アジアで頻発する災害に対し5者（国連機関 / 国際機関・政府 / 軍・NGO/NPO・大学・企業）の連携強化を目指したい」と参加者の協力を呼びかけました。今後もAMDAのコンセプトのもと、協力しながら「相互扶助ミッション」を進めていく宣言を採択し、参加した支部長とパートナー団体のメンバー全員が署名をして閉会しました。

バングラデシュで協力協定相次ぐ



バングラデシュ医師会メンバーとAMDA菅波代表

び、ダウン症候群と様々な障がい・疾患に関する研究、防災、リハビリマネジメントとリハビリ療法、障がいに関する研究や各種訓練における交流などを今後、三者共同で実施していくことになりました。

2018年1月20日、AMDAはAMDAバングラデシュ支部長ナイーム医師が会長を務める腹腔鏡外科協会（SLSB）と覚書を交わし、医学教育、防災、緊急医療支援、リハビリ医療などの分野で協力することで合意しました。具体的な提携内容として1) 医学教育交流プログラムの実施と研究開発、2) GPSPおよびAMDA多国籍医師団への協力、3) これ以外の分野での協力形態の模索の3点が主眼となります。

1月21日、バングラデシュ医師会とも同様の協力協定を締結、1月22日、AMDAはダッカ大学コミュニケーション障がい学部およびバングラデシュ・ダウン症協会と三者協定を結

パキスタン医師会とも締結



パキスタン医師会メンバーと

2017年12月16日、AMDAはパキスタン医師会と災害などに対する協力協定を締結しました。

同年9月に東京で開催されたアジア太平洋医師会連合総会にてAMDA菅波代表が活動紹介を行った際、参加されていたパキスタン医師会代表者の方々と面会したことで、今回の協力協定締結が実現しました。

この協定において、パキスタンや日本で災害が起こった際には、両者が協力して活動していくことを約束しました。

「こども食堂」にお米を配布

AMDA が2017年12月に設立した「こども食堂支援プラットフォーム」事業の一環として3月12日、岡山県内で「こども食堂」の運営に取り組む4団体に米120^キを配布しました。

AMDA が災害時の備蓄用に冷凍保存している県内産の「きぬむすめ」を玄米で、AMDA 本部にて手渡しました。

岡山市北区のこども食堂担当者(56歳)は「運営費に苦慮していた。とてもありがたい。ごはんをしっかり食べて幸せそうな子どもの顔を見るのが楽しみ」と笑顔。

今回の米の配布はこども食堂支援の第1弾となります。今後、年間4回の配布を予定。調味料や副食費の支援も検討しています。

洋蘭展でチャリティーコーナー

「咲かせよう美しい花、みんなの夢」をテーマにした岡山県洋蘭協会主催の「第61回洋蘭展」が2018年2月2日から3日間、総社市の農マル園芸で開かれ、AMDA は県洋蘭協会のご厚意でチャリティーコーナーを開設しました。

会場には会員の力作がずらりと並び、華やかな雰囲気。洋蘭の栽培相談コーナーをはじめ、世界の珍しいランや肥料など園芸資材も並び、家族連れらが次々と訪れて一足早い春の訪れを感じていました。会員の方々から提供された洋蘭の即売コーナーも設けられ、売上金はAMDA に寄付して頂きました。

多くの方々からご寄付をいただきました。一部を紹介します。



極真会 様



倉敷アカデミックウィングズ 様



中野コロタイプ 様



朝日塾幼稚園の皆様

“3.11” から 7 年 復興への遠い道のり

多くの人々の人生を変えた東日本大震災から 7 年。被災地では未だ身元不明の犠牲者の遺骨があり、放射性廃棄物があちこちで山積みのままになっています。沿岸部では盛り土がされ、インフラや住宅が少しずつ整備されています。避難指定区域だった地域は次々「解除」となっており、少しずつ前へは進んでいるものの各地で課題を抱えているのが現状です。

2017 年 10 月第 15 回「復興グルメ F-1 大会」が福島県浪江町で開催され、AMDA は岡山からボランティアバスを運行しました。被災した東北沿岸部の 11 の商店街が一体となり地域活性化のため集結しました。

会場となった浪江町は、原発事故で全町が“帰還困難区域”となり、2017 年 3 月に一部で避難指定が解除されましたが、人口は今でも震災前の 5 割の約 500 人にとどまっています。私たちは、閉鎖した店が目立ち買い物客を全く見かけない町の状況から、本当の復興への道のりはまだまだこれからであることを目の当たりにしました。

AMDA は引き続き F-1 大会などの開催や AMDA 大槌健康サポートセンター（岩手県大槌町）での活動を通し、東日本への支援を継続して参ります。

私たちは東北を忘れない

岡山での支援活動

from bizen (フロムビゼン)

県内の備前焼作家有志でつくる「from bizen」(原田良二代表)は 2018 年 3 月 10 日、売り上げを東日本大震災の被災地支援に役立てる作品のチャリティー販売会を、JR 岡山駅地下改札口前で開きました。



若手作家を中心とする 52 人が湯飲みや花瓶、ぐい飲みなど 542 点を格安で販売。値段は 500 円～3 万円の範囲内で、支払いは購入者が直接、募金箱に入れる仕組み。大勢の人が詰めかけ、午後 5 時の閉店までにはほぼ完売する盛況ぶりでした。

AMDA から職員やボランティアら 15 人が参加しました。収益は AMDA と、虐待を受けた子どもの自立を支援する NPO 法人子どもシェルターモモ(岡山市)に贈られました。

倉敷からの風

東日本大震災の復興支援を目指す倉敷市の芸術家の団体「倉敷からの風」(杉田修一代表)は 3 月 15 日から 4 日間、作品のチャリティーオークションを同市本町、ギャラリー十露で開きました。



大震災直後の 2011 年から毎年実施。AMDA に寄付された売上金は被災地支援に使われています。

7 回目となる今回は、作家 52 人が絵画や彫刻、写真、工芸など 130 点を展示。オークションは通常の半値を最低限価格としてスタートする仕組みで、市民らはじっくりと品定めをして入札希望価格を決めていました。

杉田代表は「今年も遠い倉敷の地から東北の早期復興に想いを込めて開催しました。今後もアーティストの立場から被災地に寄り添っていききたい」と話されていました。

インターン紹介

シオン・マエダ・
コウさん



2018 年 1 月 4 日から AMDA 本部でインターンとして研修していたシンガポールの男子高校生シオン・マエダ・コウさん(16 歳)が研修を終え、同月 30 日、AMDA 職員とボランティアに体験内容と感想を発表。「相互扶助など AMDA の理念が勉強でき、素晴らしい経験だった。」と述べました

ホームステイをした AMDA ボランティアの矢部賢次、朝子さん宅では「優しく温かく迎えていただいた。自然と触れ合う楽しい思い出もつくれた」とし、東日本大震災で被害を受けた東北地方の視察では「震災後 7 年が経っても狭い仮設住宅に住んでいるお年寄りに大きな衝撃を受けた」と顔を曇らせました。

AMDA 本部では「人の役立つことが大きな喜びであることを学んだ。今後も(心の中で)AMDA と一緒に歩んでいきます」と決意を述べました。

北陸の雪害で緊急支援

岡山県総社市と AMDA 合同チームは 2 月 8 日、降り続く大雪で 1981 年以來の深刻な雪害に見舞われた北陸地方の福井県勝山市に向け出発。現地で不足している除雪車用の軽油 4 千ℓを運びました。

総社市が勝山市の支援要請を受け、AMDA に協力を呼び掛けて実施。総社市職員 4 人(一般職員 2 人、消防職員 2 人)と AMDA 調整員 1 人が乗用車 1 台、タンクローリー 1 台に分乗し、午前 8 時に総社市役所を出発。午後 4 時半に到着しました。

(編集責任者・今井康人)